

明和七年（一七七〇年）六月 資料九五号
藤堂和泉守（八代高悠）葬儀焼香図にある文

解説 明和七年六月二日、十九歳で死去した八代高悠の常行寺での追悼拝礼場見取図に付されていた文。文殊院延精のサインがある。先例を尊ぶ武家社会に生きる知恵として後日のために書き残したのであろう。

代々藩主の葬儀は津で行われていたが、伊賀上野でも関係者の拝礼が行われ笠置寺も参列するのが常であった。藤堂藩の配下に入ってからには領下の寺並の扱いとなったが、やはり歴史の重みから。藩主からの判物の頂戴、藩主病気の際の平癒祈祷の命、藩主の伊賀上野へ入城の際の挨拶参上など、別格の扱いとなっていたのであろう。

書面を封入していた封筒には「御焼香控書」とあり、「御焼香御拝礼書付」と書かれている。なおこの本文は絵図の隅に小さく書かれ、また虫食いによる破損もあり、判読困難な字が多い。

絵図による常行寺の追悼供養の様子（別図参照）

棒突と称する護衛の兵が二列、十六人が固める常行寺の表門を入り、玄関を上がった所で拝礼衆の僧はまず待機する。右隣の広間は鍵型に左に広がっていて、左手奥に仏間がある。広間に通されると、広間の端に常行寺と大福寺の僧が着座、正面奥に藩の重役である加判奉行三人が着座している。拝礼の僧は広間に入って左手奥の拝礼所に向かう。上段の仏間に故藩主の位牌が安置されていて、位牌の横に読経の僧（常行寺とその末寺の僧）が黒衣、袈裟は黒袈裟や色袈裟で読経を行っている。拝礼衆は上段下の焼香台で焼香を行い奉行衆に一礼し、退出する、という手順である。

原文

明和七庚寅年（一七七〇年）六月二日藤堂和泉守様、於江戸御逝去、御年十九歳、御隠居大膳様依仰閏六月廿七日、廿八日、上野於常行寺、一夜別事、御法事有之候、廿八日午刻僧衆御拝礼^ヲ被仰出候、当山惣代文殊院周海、廿七日未頃上野へ出立、着仕第、御城代并両御加判奉行并古市加判奉行^江相届^ケ候事、御拝礼後先相届^ケ候事、今度名張御名代両人御拝礼、次当山惣代、加茂東明寺、大和虚空蔵僧、吉野不願寺、右御拝礼早^ク相勤候事^ハ、末寺之僧取持、世話^ニ預り候趣也、尤前々^{ヨリ}之分着次第城和上野前後別無之候、焼香御拝礼相勤候格^ニ候由